

平成20年度病虫害発生予報第7号

平成20年8月21日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要 [参考]

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病(穂いもち)	-	やや少ない
		紋枯病	-	やや少ない
		トビイロウンカ	-	少ない
		斑点米カメムシ類	-	多い
ダイズ	ダイズ	紫斑病	平年並	平年並
		ハスモンヨトウ	平年並	平年並
		カメムシ類	-	やや多い
果樹	ナシ	ハダニ類	-	多い
		シンクイムシ類	平年並	やや多い
		カメムシ類	-	多い
野菜	共通(か、け、りょう)	トマト、ミニトマト	-	-
		キャベツ、ブロッコリー	平年並	やや少ない
		イチゴ	-	-
	ネギ、ナガイモ	シロイチモシヨトウ	平年並	平年並

気象予報(抜粋)

1か月予報(8月16日~9月15日:8月15日、広島地方气象台発表)

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量などの確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

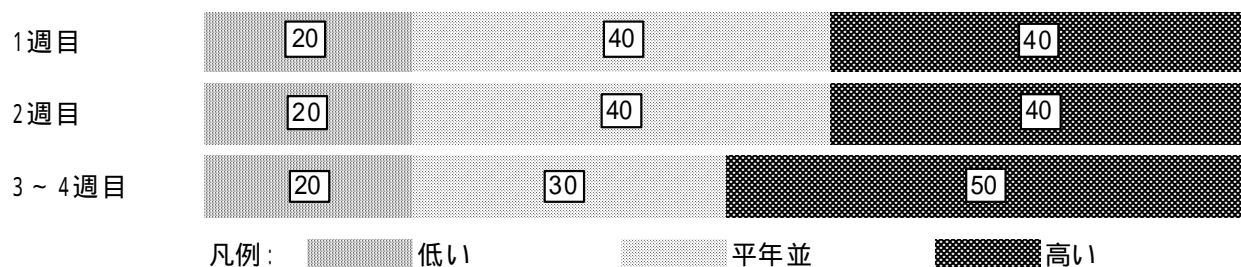
向こう1か月の気温は、高い確率50%です。

週別の気温は、1週目と2週目は平年並又は高い確率ともに40%、3~4週目は高い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イネ]

1 いもち病（穂いもち）

（1）予報の内容

発生地域 県下全域
発生量 やや少ない

（2）予報の根拠

ア 7月下旬現在、葉いもちの発生ほ場率は18.4%（平年：34.7%）で、平年に比べてやや少なかった。その後も、梅雨明け以降の好天により、一部の中間～山間地を除き、葉いもちの病勢は停滞し、上位葉における発病もほとんど認められていない。

イ 穂いもちの感染時期である出穂期以降も高温少雨で経過している。

（3）防除上注意すべき事項

中生品種、遅植などで出穂期～穂揃い期を迎えている地域では、出穂前後の防除を徹底する。

2 紋枯病

（1）予報の内容

発生地域 県下全域
発生量 やや少ない

（2）予報の根拠

ア 7月下旬現在、発生ほ場率は27.2%（平年：39.6%）で、平年に比べてやや少ない発生となっている。

イ 8月19日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における発生はやや少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、平年と同様に、本病の発生に好適であると予想される。

（3）防除上注意すべき事項

残暑などにより病勢進展が衰えず、出穂後の防除が必要な場合には、粉剤などにより追加防除を行う。

3 トビイロウンカ

（1）予報の内容

発生地域 平坦部
発生量 少ない

（2）予報の根拠

ア 8月第1半旬現在、予察灯への総誘殺数は平年に比べて少ない。

イ 7月下旬現在、現地ほ場での発生は確認されていない。

（3）防除上注意すべき事項

ア 現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、ほ場間差が大きいため、各ほ場における生息密度に注意し、今後の病害虫発生予察情報を参考にする。

イ 8月下旬以降の要防除水準は、成幼虫数10頭/株である。要防除水準を超えているほ場では、粉剤などを使用して防除を行う。

4 斑点米カメムシ類（平成20年7月23日付、病害虫発生予察注意報第5号発表）

（1）予報の内容

発生地域 県下全域
発生量 多い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、現地ほ場での発生ほ場率は62.7%（平年：41.4%）、要防除水準（50回振り成幼虫数4頭以上）を超えているほ場率は29.9%（平年：22.2%）で、平年に比べて発生が多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、カメムシ類の水田への飛来、イネへの加害活動に好適な条件となると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上旬に出穂期を迎えたほ場（ひとめぼれ、コシヒカリなど）で、穂揃い期～乳熟初期にかけて防除を行っていないほ場では、発生状況を確認し、要防除水準を超えている場合には直ちに防除を行う。

また、防除を行ったほ場においても、周辺に発生源（イネ科雑草）が多い場合には、発生状況に注意し、要防除水準を超えている場合は防除を行う。

イ 現在、出穂期～穂揃い期を迎えているほ場（中生品種、遅植えなど）では、穂揃い期～乳熟初期の基本防除を徹底する。その後も発生が多い場合には7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。

また、出穂20日前頃に水田周辺のイネ科雑草地、畦畔などの草刈りを行っていない場合には、穂揃い期～乳熟初期に草刈りを行い、草刈り後直ちに防除する。

ウ 水田内で穂をつけたヒエ類は、カメムシ類の発生を助長するので直に取り除く。

エ 要防除水準は、捕虫網50回振りすくい取り調査で4頭以上である。

[ダイズ]

1 紫斑病

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 大豆の開花期は平年並となっている。

イ 向こう1か月の気象予報から、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除に水和剤を用いる場合は、アミスター20フロアブルの3,000倍液に、カメムシ類の防除剤及び展着剤を加用し、開花期後25～30日に1回、150～300L/10aを散布する。粉剤を用いる場合は、マネーグトレボン粉剤DLなどを開花期後25～30日に1回散布する。

2 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア ダイズほ場では、平年並の8月上旬より幼虫の発生が認められた。

イ 8月第2半旬現在、フェロモントラップへの総誘殺数は平年に比べてやや少ない。

ウ 8月上旬現在、発生ほ場率は16.7%（平年：40.8%）で、平年に比べて少ない発生となっている。

エ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生に好適であると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努め、発生初期の場合、葉の切除などによる捕殺を行うか、農薬のスポット散布を行う。
- イ 防除の目安は、1 a 当たりの白変葉か所数3～5か所以上とする。なお、新葉の出葉により、白変葉が確認されにくいほ場が多いので、観察に当たっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内での観察も行う。
- ウ 若齢幼虫に対する登録薬剤の効果は高いが、齢期が進むと防除効果が低下するため、防除適期を逸しないようにする。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月上旬現在、現地ほ場ではホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシの発生がみられ、発生ほ場率は52.4%（平年：42.4%）で、平年に比べてやや多い発生となっている。
- イ 8月第1半旬現在、予察灯における総誘殺数は平年並となっている。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、カメムシ類の発生に好適であると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 近年、9月以降にカメムシ類の密度が急増する傾向がみられるので、今後の発生に十分注意する。
- イ 若莢期にあたる開花期後25～30日と、その10日後に薬剤を散布する。その後も発生が多い場合、幼虫の密度が再び増加する9月上～中旬頃に追加防除を行う。

果 樹

〔ナ シ〕

1 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 多 い

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、県予察ほ場（北栄町）におけるクワオオハダニの1葉当たり雌成虫数は11.2頭（平年：0.01頭）で、平年に比べて多い。一方、カンザワハダニ及びナミハダニの発生は認められていない。
- イ 現地のナシ園では、クワオオハダニを中心に密度が高いほ場が散見される。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、ハダニ類の増殖に好適であると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発生が多い園では、散布量を増やし、枝を洗うように丁寧に薬剤散布する。
- イ 薬剤の散布にあたっては、連用を避けて輪番散布する。薬剤はコロマイト乳剤1,500倍液、カネマイトフロアブル1,500倍液、マイトコーネフロアブル1,500倍液などを使用する。なお、薬剤の散布にあたっては農薬の使用基準を遵守する。

2 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類成虫の誘殺数は平年並～やや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第3世代成虫(第4回成虫)の発生時期は、平年並の8月下旬～9月中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ナシヒメシンクイの発生盛期となる8月下旬～9月中旬の防除を徹底する。特に、昨年被害が多かった地域では、本年も被害発生が懸念されるので注意する。

イ 薬剤はアグロスリン水和剤2,000倍液などを散布する。なお、薬剤の散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守する。

[共通(ナシ、カキ、リンゴ)]

1 カメムシ類(平成20年7月11日付、病害虫発生予察注意報第3号発表)

(1) 予報の内容

発生量 多い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、予察灯などにおけるチャバネアオカメムシ、クサギカメムシの誘殺数は平年並～やや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、カメムシ類の加害活動に好適であると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。

イ 防除は、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。

ウ 薬剤は樹種ごとの防除暦を参考とする。

エ 樹種によっては収穫間近となっているので、薬剤の散布にあたっては、特に使用時期に注意し、農薬の使用基準を遵守する。

野 菜

[トマト、ミニトマト、キャベツ、ブロッコリー、イチゴ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場(北栄町)でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数及び幼虫による食害はやや少ない。

イ 現地ブロッコリーほ場でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数は少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤の防除効果が高い若齢幼虫期のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、被害がみられた場合には直ちに防除を行う。
- イ トマト及びミニトマトでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、マッチ乳剤3,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫がみられる場合には、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。
- ウ キャベツでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、ノーモルト乳剤2,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫がみられる場合にはトルネードフロアブル2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液、アフーム乳剤1,000～2,000倍液、マトリックフロアブル2,000倍液などを散布する。
- エ ブロッコリーでは、プレオフロアブル1,000倍液、カスケード乳剤4,000倍液などを散布する。

[ネギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、県予察ほ場（北栄町）でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数はやや少ない。
- イ 現地ネギほ場でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並～やや少ない。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 幼虫が若齢の時期に防除を行う。これを逃すと防除が困難となる。
- イ ネギでは、ランネート45DFの1,000倍液、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、ハチハチ乳剤1,000倍液、アフーム乳剤1,000～2,000倍液などを散布する。
- ウ ナガイモ（ムカゴを含む）では、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液を5～7日間隔で2回程度防除を行う。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には充分注意しましょう。**

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報やフェロモントラップの調査結果(野菜・シバの各種害虫、果樹のシンクイムシ類)、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、9月11日(木)の予定です。